

『八月十五夜の茶屋』にみる占領と被占領

米軍人と沖縄住民のユートピア的關係*

名嘉山リサ

はじめに

本発表では、ヴァーン・スナイダーの『八月十五夜の茶屋』における米軍人と沖縄住民の接触によってもたらされる現地化や民主化に焦点を当て、占領者と被占領者がどのようにユートピア的關係を作り上げていくかを考察した。スナイダーは、米陸軍中尉として第二次世界大戦時に従軍し、退役後職業作家になった人物で、本作は沖縄での体験をもとに書かれたフィクションだが、実際に見聞きした要素がふんだんに用いられたトラベル・ライティング的な作品でもある。戦争で荒廃したトビキ村に米軍が駐留し、学校をはじめとするインフラの整備や、住民の民主化を行おうとする過程で起こる米軍人と沖縄住民の異文化接触が描かれている。

フィズビーの現地化—異文化、異人種の尊重

トビキ村にやってきたフィズビー大尉は、物語の早い段階から上官の命令には従わず、現地住民の話を聴き、比較的早いペースで現地化していく。フィズビーは、入隊前はオハイオ州でドラッグストアを経営していた人物という設定で、軍人には向かないタイプとして描かれている。また、サンタクロースのようにトビキ村の人々に様々なものをプレゼントする思いやりのある人物ということも暗示される。

その「プレゼント」の中でもっとも重要なものが茶屋である。フィズビーは全く知らない相手の文化を自国のそれに引き寄せて想像し、相手が必要としていることに応じて計画を変更し、しなやかに対応できる人物であるため、トビキ村にとっての茶屋の重要性を理解し、建設を許可する。フィズビーは茶屋の建設も手伝うことになり、その過程で現地化していく。貨幣経済が破綻した戦後沖縄で、茶屋建設に必要な物品を調達するためには物々交換をしなければならず、村人たちは近隣の村々を訪ねて物々交換で物資を調達するのだが、それと同行したフィズビーはのちにそのやり方を真似て軍人たちと物々交換をし、目当ての品を手に入れる。

また、のちに戯曲化・映画化された際のフィズビーが無理強いされるのとは違い、小説のフィズビーは、自ら進んで下駄を履く。軍から支給されたブーツを自らの意思で脱ぎ、下駄に履き替えるというシンボリックな行為で現地化の一步を踏み出し、ついには、下駄をはいたまま誰かに指摘されるまで履き続けるなど、現地化が進んでいく。演劇や映画版に比べると、小説のフィズビーはより主体的に現地化をし始めているといえる。

植民地で現地人と接していると、入植者もついには原住民文化に染まり、文明から退化してしまうという植民地主義の言説があるが（ストーリー 84）、本作品においてフィズビーは、元々の資質も相まって、かなり早いペースで現地化、つまり「文明から退化」していく。フィズビーは「文明から退化」することにより、米軍の占領政策の規範を崩すことになる。この転換は、ストーリーが指摘する、「抑圧的管理」から「合意を重視する植民地主義の戦略」への移行をも彷彿とさせる（170）。現地化は立場の違うものたちへの想像力をかきたて、自己省察を促し、ひいては住民自身による民主化を後押しする原動力になっていく。

女性たちの擬態による民主化

トビキ村の女性たちはフィズビーとのやり取りの中でアメリカの民主主義について学び、早速学んだばかりの民主主義をまねて実践しようとする。ある日、村の女性たちが暑い中配給のために並んでいると、芸者のファースト・フラワーとロータス・ブロッソムに気づいた配給担当者たちが彼女らを倉庫に招き入れ、一緒にお茶を飲み、配給物を好きなだけ持っていくようにと特別扱いをする。女性連盟の女性たちは自分たちが「差別」されていると感じ、フィズビーに直接抗議をするという「民主主義」を実践する。フィズビーは今後そのような差別はなくすと言い、平等に配給を与えるよう手配しようとする。しかし、女性連盟が気に入らないのは、配給員たちが村の女性たちにお茶を勧めないことで、彼女たちはそれを解決する手段として、芸者が着ているようなシルクの着物、おしろい、口紅などをフィズビーに要求する。つまり、女性連盟のメンバーは、皆が平等に配給をもらえるようフィズビーに配給員たちを叱ってほしいのではなく、彼らに自分たちと芸者を同じように扱ってもらうために、芸者の真似をしたいと要望する。フィズビーは納得がいかないが、女性たちにとってはそれが民主的な行動である。フィズビーが途方に暮れていると、女性連盟代表のヒガ・ジガは、聞いてくれないのであれば、アンクル・サムに手紙を書くと言いだす。

ホミ・バーバによると「植民地的擬態とは、ほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体としての、矯

正ずみで認識可能なく他者>に対する欲望」(148)で、「植民地権力の支配的な戦略作用を首尾一貫させ、監視を強化し、『規範化された』知識と規制力との両方に対して内在的な脅威になるという、差異あるいは抵抗の記号でもある」(149)。アメリカから教わった民主主義を女性連盟が模倣するが、フィズビーや米軍が考える「差別」あるいは「民主的行動」と女性連盟が考えるそれが乖離しており、完璧に模倣されず、その過程で差異が生じる。女性連盟はフィズビーから教わった民主主義を真似て堂々と権利を主張し、結果的にアメリカ軍の「脅威」となり、その政策が攪乱されるという状況が生まれている。

また、女性連盟は支配者アメリカだけでなく芸者をも真似ており、二重の模倣が行われている。しかし、この擬態は植民地的擬態とは異なり、抵抗や脅威というような要素はなく、村の女性たちが芸者を真似ることで芸者の「地位」が脅かされたりすることはない。トビキ村の女性にとっての民主主義は、女性らしさを獲得する手段として芸者を真似ることによる、平等権を求める行動だといえる。その際、女性連盟は芸者を非難するのではなく、芸者が持っているモノや受けてきた「教育」が違うことから生じる格差を是正するために、芸者に擬態している。「芸者」は負の部分が排除され、お金持ちで有名、きれいに着飾って芸を披露するという、アイドル的な存在の女性として描かれることで、村の女性たちのあこがれの対象となる。その後、芸者教育が始まると村の他の女性たちが女性連盟に加わりたいたと集まり生徒が増えていく。フィズビーの考える「教育」が違う意味の「教育」にすり替えられ、アメリカ化ではない独自の教育が住民の間で展開され、アメリカの思惑とは異なることが起きている。つまり、芸者から教育を受け、みな芸者を目指すことで民主化するという、この村独自のユートピア的な状況が描かれている。

民主化を後押しする通訳者

現地人通訳のサキニは、フィズビーに茶屋や芸者、女性連盟の人々のことを事細かに説明し、アメリカと沖縄をつなぐ重要な役割を担っている。サキニは20代の若者で、軍雇用員という設定である。戯曲・脚本のサキニはトリックスター的な存在で、訳し方も雑だが、小説のサキニは、ハワイ移民ですでに他界したナカムラさんから英語を教わったという設定で、フィズビーに丁寧に物事を説明している。また、会議の場では日本語を使い、それ以外では「琉球方言」を使って住民に説明をしていたことから、より正確で効率的に内容を伝えているといえる。

一方でサキニは、「芸者」は歌って踊るだけで、フィズビーが初めに考えていたような「悪い女性たち」ではないと説明するのだが、「真実」を話してしまうと茶屋の建設が認められないので「芸者」の性的な部分は隠し、戦略的「誤訳」により茶屋の建設を実現させたとも解釈できる。すなわち、サキニは単に言葉を訳すだけでなく、文化的な背景を説明し、時に通訳以上の役割を担うまく立ち回ることによって、フィズビーや住民との信頼関係を築きつつ、民主化を推し進める立役者である。よって、仮にフィズビーが日本語を話すことができ、沖縄系以外の二世の通訳者などがいただけでは、トビキ村の「民主化」はうまくいかないと考えられる。

おわりに

このように、『八月十五夜の茶屋』では、「通訳者」が占領者に沖縄の状況をうまく伝えることで、占領者が現地の人や文化を理解しようと努め、現地住民は占領者の言いなりになることなく独自の民主化を達成し、結果として統治がうまくいくという、実際にはありえなかったユートピア的な占領モデルが構築されている。アメリカ軍による初期の沖縄占領はうまくいかなかったともいわれ、スナイダー自身もそう思っていたようだが、現地化する占領者、占領者に擬態しつつも独自の民主化を達成する女性たち、両者を取り持つ通訳者によって繰り広げられる物語を通して占領政策が「修正」され、異文化接触のひとつの理想像が提唱されている。

* 本発表は拙論「ティーハウス・デモクラシー—ヴァーン・スナイダーの『八月十五夜の茶屋』における民主化—」(*Southern Review*, No. 27, 2012)の一部に加筆修正を施し再構成したものである。

参考文献

- ストーリー・アン・ローラ 『肉体の知識と帝国の権力：人種と植民地支配における親密なるもの』永淵康之・水谷智・吉田信訳（以文社、2010年）。
- バーバ・ホミ・K 『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也訳（法政大学出版局、2005年）。
- Sneider, Vern. "Below 'The Teahouse.'" *New York Times* 11 Oct. 1953: X1, 3.
- . *The Teahouse of the August Moon*. New York: G.P. Putnam's Sons, 1951.